

「近代鹿児島における在地窯業の考古学的研究」

プロジェクト参加教員

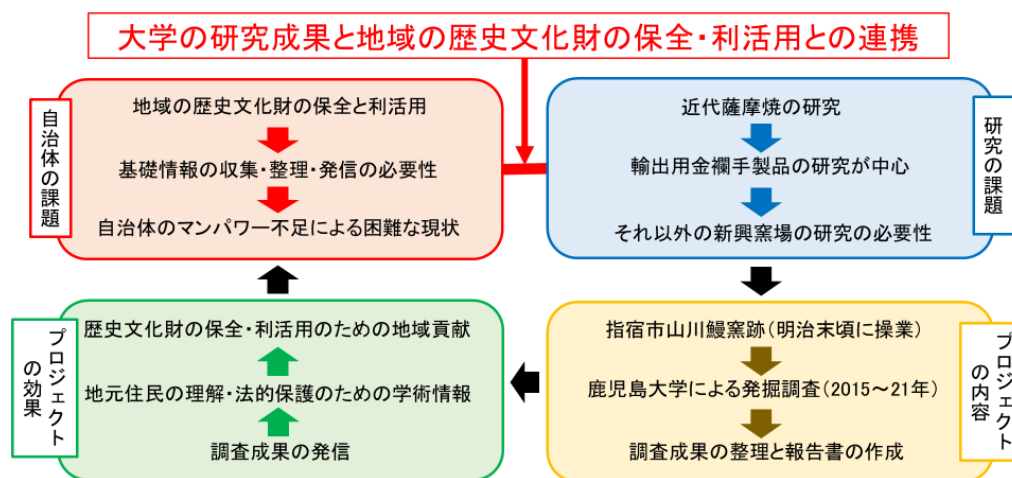
渡辺芳郎（人文学科多元地域文化コース 教授）

助成額

380,000 円

プロジェクトの目的

全国的な「平成の大合併」により地方自治体の文化財関係職員の担当面積は拡大し、十分な文化財把握が滞っているのが実状である。そのため各地域に眠るさまざまな文化資源が開発されず、利活用の機会が失われている。そこで鹿児島大学法文学部人文学科考古学ゼミ（渡辺芳郎ゼミ・石田智子ゼミ）では、2015～2020 年度に指宿市教育委員会と連携して指宿市山川に所在する鰻窯跡の調査を実施した。その調査報告書を作成することで、地域の歴史文化財の保全・活用に役立てることを目的とする。



具体的なプロジェクトの内容

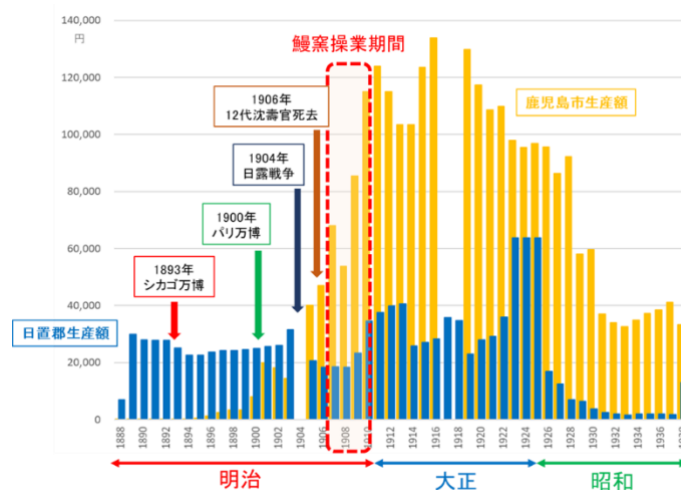
本プロジェクトの目的である指宿市山川鰻窯跡の発掘調査報告書の作成を進めつつ、その一環として、種子島中種子町野間焼関連の調査を 2022 年 12 月 8 日に実施した。鰻窯は、明治末頃、苗代川（現日置市美山）から来た陶工夫婦が開窯・操業したと伝えられており、発掘調査成果とも整合する。一方、野間焼は、明治 40 年頃、やはり苗代川の中馬友吉父子が開窯し、昭和戦前期まで操業したとされている。つまり鰻窯と野間焼とは、ほぼ同時期で同じ技術的系譜（苗代川）を有しており、両者を比較することは近代鹿児島の陶器生産技術や様相を知る上で有益である。

具体的なプロジェクトの成果

野間焼窯跡の調査と、中種子町立歴史民俗資料館所蔵の伝・野間焼製品の調査を実施した。野間焼窯跡は全長約 8.6m、全幅 3.3m を測る、燃烧室+4 焼成室からなる連房式登窯跡である。焼成室は幅 2.8～3.0m、奥行 0.8～1.3m の長方形を呈する。製品の出し入れ口は、焚口から見て右側に設置される。焼成室床面が傾斜すること、溝状に作る火床の形態など、鰻窯跡の構造と共通する特徴を持つ。また窯跡周辺に散布する製品の特徴は、明治 10～30 年代操業の苗代川雪山遺跡の出土資料や鰻窯跡のそれと類似する。

中種子町立歴史民俗資料館所蔵の伝・野間焼製品については、壺 5 件 5 点、双耳瓶（仏花器）1 件 1 点、注口付徳利 1 件 1 点、甕棺 2 件（4 点）、カメ墓 2 件 2 点を調査した。製品にかけられた暗緑色釉や褐色釉、底部の指による釉剥ぎなどの特徴は、雪山遺跡出土品と共通性が見られる。また甕棺の習俗は、近世の江戸や福岡に見られるが、鹿児島本土地域にはない。同じ技術系譜を有しながらも、地域の需要の違いにより製品内容は異なっていたのであろう。

鰻窯・野間焼ともに明治末頃、苗代川の陶工が開窯している。同時期、苗代川の陶磁器生産額は、鹿児島市内のそれに凌駕され、相対的に減少する。また苗代川で求心力を持っていた沈壽官が死去する。この低迷を背景に、鰻窯も野間焼も「新天地」を求めた陶工が開窯したと推測される（下図参照）。



鹿児島市と日置郡（苗代川）の陶磁器生産額の推移（1888-1938 年）

プロジェクトの成果物

<論文>

渡辺芳郎「短命な窯：鹿児島県指宿市山川鰻窯跡の事例」『江戸遺跡研究』10（印刷中）

<講演・口頭発表（国内）>

渡辺芳郎「短命な窯：鹿児島県指宿市山川鰻窯跡の事例」江戸遺跡研究会第180回特別例会 2022年7月17日（オンライン）



種子島中種子町・野間焼窯跡



中種子町立歴史民俗資料館所蔵・伝野間焼製品